



江戸時代の水道

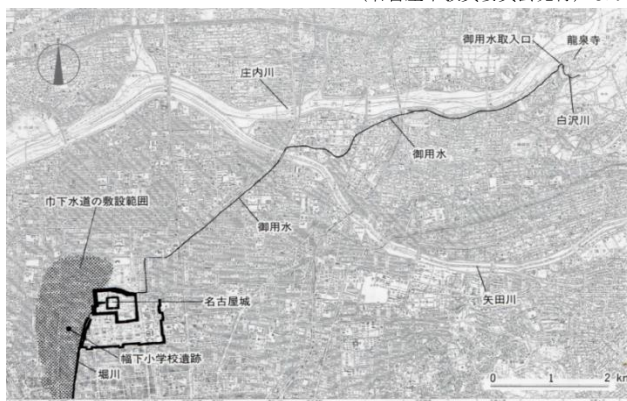
堀川より東側の名古屋城下では、生活用水の確保は、掘り井戸でしたが、堀川より西側の城下は、庄内川などの氾濫・堆積により作られた低湿地で、井戸を掘っても良質な生活用水を確保できませんでした。

このため、尾張藩は寛文3年(1663年)庄内川の川村付近(守山区)から名古屋城の堀までの水路(御用水)を作り、さらに寛文4年より名古屋城の堀から堀川の西側

側一帯へ木製の水道管(木樋)を使って生活用水を配水していました。これを「巾下水道」と呼びます。

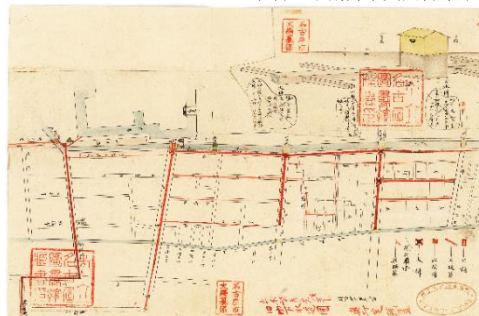
御用水と巾下水道

「幅下小学校遺跡-第4次発掘調査の概要-」(名古屋市教員委員会発行)より



巾下水道図

名古屋市鶴舞中央図書館蔵



巾下水道の木樋復元



名古屋市の歴代マンホールのふた

名古屋市の下水道創設期に採用され、このタイプは名古屋市型として東京市型とともに全国に広まりました。穴が多く開いた構造は、ガス抜きや路面排水に効果がありましたが、その反面悪臭や強度不足など維持管理上の問題点がありました(昭和初期頃まで使用)。

名古屋市型のふた

